石川県立
Ishikawa Museum of Natural History
自然史資料館
ニュースレター
No.15
2020.12

みんなでつくる自然史資料館

石川県の自然 調査・学び・体験

参加型ミュージアム

ごあいさつ

禍(わざわい)を転じて福と為(な)す － 新型コロナとレッドデータブック －

オンラインシンポジウム（一般視聴者会場）の様子

皆さま、おかわりございませんか。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ禍）がおさまるどころか、第３波が懸念されています。自然史資料館では、感染を避ける工夫をしながら、ほぼ通常通り開館しています。検温、マスク着用、タッチ標本を撤去し、「三密」を避けるため受講者数を減らし、密着指導が必要な講座は休止しています。しかし、この対応策だけでは、来館者数が減少し、提供メニューが貧弱になるばかりです。ウイルス感染症は、自然のなかで、人や他の生物を巻き込んで起きていることです。コロナ禍のいまこそ、自然のしくみを学び、体験し、楽しみ、活かすプログラムを皆さまに提供するのが、当館の役割です。コロナを恐れるあまり、巣ごもりになっていませんか。コロナという災いを新しい取り組みのきっかけにしましょう。表題の成語は、中国の古典（史記と戦国策）に出ているそうですが、「チャレンジ精神と工夫によって、ピンチをチャンスに変えよ」といっています。当館でも、講座の新メニュー、少人数での野外観察、野外の生物や当館の収蔵物などの紹介動画をつくってホームページで公開するなど、新しい取り組みを企画中です。

コロナ禍以来、オンラインによる講演会、ワークショップ、打ち合わせ等がいたるところで日常化しています。以下に当館が実施したオンライン番組を紹介します。５月の「オープンミュージアム2020」をふたつのオンライン・ワークショップに切り替えました。『石川の自然と文化に触れるビオトープつくり』（５月17日）と、『影絵劇「おきなぐさ」とオンラインさんぽ』（６月28日）です（p.３参照）。県内の絶滅危惧種の情報をまとめた「いしかわレッドデータブック2020」が７月に刊行されました。その記念に企画展「いしかわの生物多様性とレッドデータブック」（９月19日～12月27日）を開催し、その関連シンポジウム『いしかわレッドデータブック2020を読み解く　解説＆討論』をオンラインと会場の両方で実施しました（p.２参照）。コロナ禍を転機として、これからも新しい取り組みを繰り広げてゆきたいと思っています。

（館長　中村 浩二）

【プロフィール】
1947年神戸市生まれ。金沢大学名誉教授。金沢生活が40年をこえました。昆虫の生態調査（日本とインドネシアなどの熱帯）、里山里海の保全・活用、若手人材の育成（能登とフィリピンのイフガオ棚田）にとりくんでいます。

【新型コロナウイルスの対応について】
新型コロナウイルスによる感染症の拡大を防ぐ対応をとりながら開館しています。
詳しい情報は、当館ホームページをご覧ください。

企画展

「いしかわの生物多様性とレッドデータブック」とシンポジウムの開催

展示の様子

今年７月に「いしかわレッドデータブック2020」（動物編と植物編の２冊）が刊行されました。県内の絶滅するおそれのある野生生物がリストアップされ、現状がまとめられています。資料館では、この最新版のレッドデータブック（以下、RDB）の刊行を記念して、９月19日から12月27日まで企画展「いしかわの生物多様性とレッドデータブック」を開催しました。

自然界には無数の生物種が存在し、それらが複雑につながり、多様な生態系をつくっています。これは生物多様性とよばれ、私たちに「自然の恩恵」と安定した環境をもたらしています。しかし、いま世界でも日本でも生物種の絶滅が加速しています。RDBで絶滅危惧生物をリストアップするのは、多くの種が絶滅の危機にあることを広く伝えるためです。県のRDB初版は1999年度に刊行され、10年おきに改訂され今回は第３版です。企画展では、世界と石川県の生物多様性、絶滅率の増加、県内の絶滅危惧種をめぐる状況を紹介しています。本展示が自然と人が共生する地域づくりの一助になることを願います。

11月28日には、関連シンポジウム「いしかわレッドデータブック2020を読み解く　解説&討論」を開催しました。生物種の絶滅が社会に及ぼす影響の大きさの割には、RDBという言葉や内容は県民にはあまり知られていません。本シンポジウムでは、RDBへの理解を深め、活用法や今後必要な取り組みを議論しました。オンラインと会場を合わせて、約50人が参加しました。RDBの編集に携わったパネリストによる解説の部（パート１）では、分類群ごとに絶滅危惧種の変動や現状報告を聞き、討論の部（パート２）では、予算不足、調査員の高齢化・人材不足などの課題を議論しました。10年後のRDB第４版の刊行に向けて、今後の方向性を考える重要なシンポジウムとなりました。自然史資料館もさらにがんばりたいです。

（副館長・植物担当学芸員　中野 真理子）

カザグルマの標本展示

県内絶滅種が再発見され、
RDB第３版では絶滅危惧Ⅰ類として
掲載されました。

topic

トキ（学名：*Nipponia nippon*）・・・

スペシャル展示

『トキ「能里」がいま語りかけるもの』とリレートーク

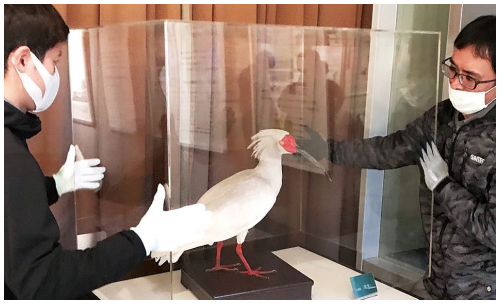
会期：2020年11月１日㊐～７日㊏

かつて能登半島には、トキが群れ飛んでいました。昭和45年には、本州最後の一羽が捕獲され、繁殖のため佐渡へ送られました。そのトキは翌年死亡し、「能里（のり）」という愛称で、石川県立歴史博物館に剥製が保管されています。

捕獲から50年の今年、この貴重な剥製をお借りし、企画展「いしかわの生物多様性とレッドデータブック」開催中のスペシャル展示として公開しました。羽根の美しい朱鷺色が損なわれぬよう、展示室内の照度等の環境を考慮し、１週間だけの展示となりました。８年ぶりの公開ということもあり、「能里」との再会を心待ちにしていた多くの来館者に歓迎されました。

展示初日には、リレートーク『能登最後のトキ「能里」をめぐる語りあい』を開催しました。歴史博物館職員の石川県の歴史・文化とトキの関わりについての講演や、絶滅前のトキの目撃証言と体験談、保護活動の現状などをお話しいただきました。会場では、子供から高齢の方までが耳を傾け、絶滅したトキを偲び、美しいトキが再び能登の空を舞う未来に、共に思いを馳せたひと時でした。

（学芸職員　髙内 香）


「能里」搬入 ／ 10月30日

リレートーク ／ 11月１日

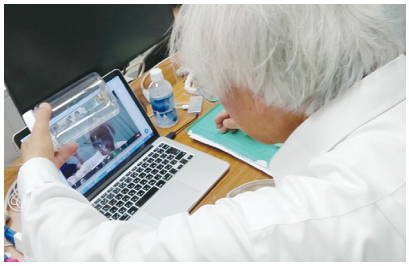
スペシャル展示の開催にあたりご尽力いただいた環境省、石川県立歴史博物館、ならびに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

活動

Open Museum

大好評！ 影絵劇「おきなぐさ」とオンラインさんぽ

幻想的な絵と音の世界にひたる



散歩で見つけたカマキリを紹介する中村館長

昨年に続き、お楽しみイベント「オープンミュージアム2020」を実施予定でしたが、新型コロナの影響で、オンラインでのワークショップのみの開催となりました。１回目は「石川の自然と文化に触れるビオトープつくり」（５月17日）、２回目は『影絵劇「おきなぐさ」とオンラインさんぽ』（６月28日）でした。

第２回ワークショップを紹介します。石川県指定希少野生動植物種のオキナグサの生態を解説した後、宮沢賢治の「おきなぐさ」という作品の影絵劇を生中継しました。OHP投影された影絵に合わせ、朗読と美しい音楽（ライブ演奏）で「おきなぐさ」を表現しました。後半は、「オンラインで散歩する」という企画です。おでかけできる人は実際に散歩したり、おうちで自然を探したり、館長と参加者の資料館周りの散歩にオンライン参加したり（スマホ中継されました）、思い思いにお散歩タイムを楽しんだ後、見つけた何かについて発表をしました。みんながたくさん発言して、楽しく交流できました。この企画は、影絵作家、音楽家、休校中に子供たちをネット上でつなぐ活動をしている環境教育グループの方々の参加により、初の試みでしたが大成功でした。

自然・アート・音楽が融合したこんなワークショップを通して、ジャンルを超えた活動がさらに広がるといいなと思います。

（副館長・植物担当学芸員　中野 真理子）

topic

いつからあるの？「松・竹・梅」

縁起の良い「松竹梅」として、身近な植物です。中国では「歳寒三友」といわれ、清廉潔白・節操を表し、南宗画の題材にもなっています。中学校では、松は裸子植物、竹は被子・単子葉植物、梅は被子・双子葉植物と学習します。この３種は、『万葉集』には詠われていますが、もとから日本にあった植物なのでしょうか。

『魏志』倭人伝（３世紀後半）には、梅・篠・桃と推定できる植物は述べられていますが、松はありません。邪馬台国に松はなかったのでしょうか。泥炭層の花粉調査から、水田耕作の始まった弥生時代から増えたことがわかり、近年の化石研究により、クロマツは約270万年前に日本で種分化したことがわかりました。古来から、常盤木（ときわぎ）の松は歳神の依代（よりしろ）として、また竹も神の宿るものとされ、身近にありました。しかし、かぐや姫の絵本にあるような太い孟宗竹は、江戸時代に中国から渡来した植物です。今では各地で手入れができず厄介者になっています。梅は、遺跡調査から、稲作の伝来時期に桃・柳などとともに渡来したことがわかっています。ある花伝書によると、16世紀初めには、三瓶一対の祝儀の花として「松竹梅」が成立しました。

（教育普及　平野 恒男）

団体係のきまぐれコラム

おいでませ、桃源郷へ

館の前の素敵な桃の花

ここ銚子町は、金沢の桃源郷。春には館の２階から、赤白黄の花の帯が見渡せます。赤は桃、白は梨、黄色は菜の花。うっとりする景色は、このへんが果物の産地だからです。果樹園の向こうにはピンクの桜並木が続き、浅野川をはさんだ斜面の新緑を背景に、花々が見事に浮き立ちます。湯涌温泉への道沿いでは、さすがは「ゆずの街道（みち）」、たくさんのユズが花開きます。年によっては田んぼがレンゲの赤紫に染まったりして、春はウキウキです。お得情報。ここの桜は、町中で散り始める頃に満開になります。二度楽しめて最高です。

８月には桃、９月には梨が熟して、農協から出荷されます。うまさは折り紙つき。出荷後の午後４時頃からは直売もしています。湯涌街道沿いにあるので、試しに買ってみるのもお得です。

そうそう、近所には蜜蜂の巣箱がたくさん並んでいて、働き蜂が忙しく出入りするのを見られます。残念ながら、この蜜は自家用とのこと。なめてみたいという願いがかなうことはなさそうです。

（教育普及　石丸 信一）

ご近所の梨の花園

ご近所の豪華な菜の花畑と桜並木

活動 コロナ対策をしてイベントを実施しています

イベントの様子

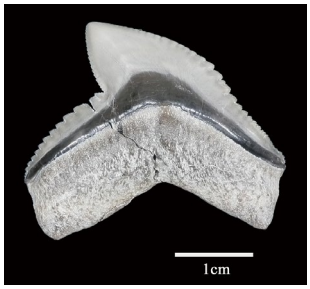
今年はコロナ禍が広がっており、その対策を講じた上でイベントを実施しています。現在、来館者にはマスクの着用や手指の消毒をお願いしています。また、入口で検温し、発熱などの風邪症状がある場合は、入館・イベントへの参加をお断りしています。館内では、講師を含め全員がソーシャルディスタンスを確保するよう配慮し、十分に換気できる広い場所を会場にしてイベントを実施しています。

10月17日の「昆虫飼育講座　－カブトムシの幼虫を育てようー」では、参加者は、全員マスクを持参・着用した上で付き添いの保護者と一緒に座り、作業台は家族ごとに別にしました。座席を予め番号で指定し、机や椅子はアルコールで消毒済みです。参加者は、感染症対策に気を使いながらも、普段じっくり見ることのないカブトムシの幼虫に興味津々の様子でした。その後、自分のケースに湿らせた腐葉土をつめて幼虫を入れ、セットアップが完了した飼育容器をうれしそうに持ち帰っていました。

多くの方が安心・安全に参加できるよう、これからも感染症対策をしっかりと講じた上でイベントを実施する予定です。

（動物担当学芸員　嶋田 敬介）

イチ押し収蔵品 地学分野 大きなイタチザメ類の歯



イタチザメ類の歯の化石

石川県中部から富山県にかけての一帯は、170万年前～80万年前は海でした。その海底に砂が積もってできたのが大桑（おんま）層で、二枚貝類や巻貝類、ウニ類、フジツボ類などに加え、魚類やクジラ類などの脊椎動物化石が産出しています。金沢市内では、犀川や浅野川の河原などで大桑層を観察できます。

2014年４月末に、犀川にかかる大桑貝殻橋付近の大桑層から、クジラ類の化石が発見されました。頭骨や下顎骨、肋骨などが発掘され、サメの歯も一緒に産出しました。この標本は、その形状からイタチザメ類の歯と考えられます。サメの歯は、大桑層からはよく見つかる化石です。上記のクジラ類化石の発掘時には、他のサメの歯も複数産出しました。また、イタチザメ類の歯は、同層内の他の場所でも見つかっています。しかし、この標本は、最大幅が33ミリ、最大高が28ミリもあり、イタチザメ類の歯としては大きいものです。また、歯冠の根元の部分は黒くなっています。現生のサメの歯にはこのような模様はありません。大きい上に、色付きの模様を持つこの標本はとても貴重であり、当資料館の“お宝”の一つとなりました。

（地学担当学芸員　桂 嘉志浩）

お知らせ

団体利用しませんか?

かんたん工作　体験講座　ミニ講演会　野外観察会

子供から大人まで多くの方に自然に関心を持ってもらえるよう、各種団体向けのプログラムを用意しています。まずはHPをご覧になり、電話でお問い合わせください。できるだけご要望にお応えできるようにしておりますので、遠慮なくご相談ください。

（教育普及　神代 博司）

葉脈標本づくり

利用案内

開館時間 ／ ９：00～17：00（入館は16：30まで）
休 館 日 ／ 12月29日～１月３日
入 館 料 ／ 無　料
駐 車 場 ／ 完　備（大型バス駐車可）

交通案内

《バスをご利用の場合》
金沢駅東口バスターミナル

■ ６番乗り場
『12 湯涌温泉ゆき』または
『12 北陸大学薬学部ゆき』または
『12 北陸大学太陽が丘ゆき』
→【銚子口下車】→徒歩約10分

■ ７番乗り場
『95 北陸大学太陽が丘ゆき』または
『95 北陸大学薬学部ゆき』
→【北陸大学太陽が丘下車】
→徒歩約10分

石川県立自然史資料館

〒920-1147　石川県金沢市銚子町リ441
TEL：076-229-3450　FAX：076-229-3460　https://www.n-muse-ishikawa.or.jp/